

# 山田寺北面大垣の調査

## —第188-11次

### 1 はじめに

特別史跡山田寺北辺の法面改修工事にともなう発掘調査である。試掘調査として先行して実施した第188-8次調査では、東区で石積の排水路SD540B、中区で北面大垣SA570の柱穴列、西区では暗渠状遺構SX762をそれぞれ検出した（『紀要 2017』）。その結果、中区と山田寺第6次調査の成果を総合的に理解すると、中区以西では北面大垣の柱穴列と工事予定範囲とが重複する可能性が高まった。そのため、工事範囲西端での大垣の正確な位置を確認すべく、第188-8次の西区を拡張して確認調査を実施し、施工方法を検討することとなった。

調査面積は21㎡で、第188-8次西区の北半を取り込むかたちでL字形に設定した。調査期間は2017年2月7日から2月16日までである。

後述のように、推定通りの位置で北面大垣の柱穴列を検出したため、工事はこれを避けて実施することとなった。調査区東側については、工事掘削範囲に大垣の柱穴がかかる可能性があったため、引き続き立会調査をおこなった。その結果、大垣の柱抜取穴2基を検出し、適切な工法により、遺構の保護措置を講じた。

以下、今回の調査成果の概要を述べる。

### 2 検出遺構

**基本層序** 上から、①耕作土・床土、②北面大垣廃絶後の遺物包含層である黒褐色土、③橙・褐色等の粘質・砂質土からなる大垣造営時の整地土である。後述のように③層は、新旧大垣の設置にともない2時期に分かれる。

調査区の北端は、後世の開削および地滑りによって法面となっており、その法面を覆う土砂および①層を取り除き、黒褐色土を除去しながら遺構検出をおこなった。黒褐色土を掘り下げる過程で、瓦組暗渠4条を検出した。瓦組暗渠は創建期の瓦を使用するものの、北面大垣の柱穴列に重複することから、大垣廃絶後に設置されたものであることが間違いない。

大垣造営時の整地土は、10～20cm程度の厚さで盛土を繰り返す。地山および旧表土は未検出であるが、北向き

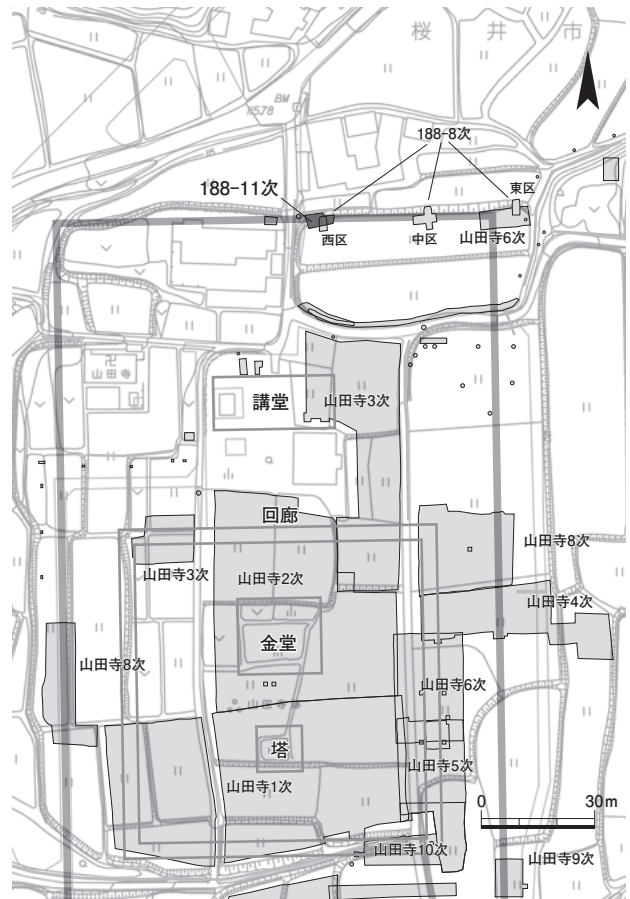


図129 第188-11次調査区位置図 1:2000

に下降する旧地形に対して大規模に盛土造成をおこなった様子が看取できる。

**北面大垣SA570** 北面大垣をなす大型掘立柱の柱穴列。調査区内で3間分を検出したほか、東側に隣接する立会調査区でも柱抜取穴2基を確認した。各柱穴の北端は、北側の民家に向かって下降する法面によって削平を受ける。また、後述のように東側の2基は、上部に瓦組暗渠が重複する。

掘方は総じて大型で、西から2基目では一辺2m程度を測る。断割調査はおこなっていないが、おなじく西から2基目に穿たれた攪乱坑の断面観察により、検出面からの深さは0.9m以上に達することが判明する。柱間は約2.4mで、8尺間とみる従来の所見と矛盾はない。

なお、東から2基目の柱穴には新旧2時期分の掘方があり、厚さ25cm程度の橙色の整地土を挟んで掘り込み面を違える。ただし、新旧の柱穴を検出したのは、東から2基目のみであり、その他では掘方の重複は認められなかった。とりわけ、東端の柱穴では、前述の瓦組暗渠に

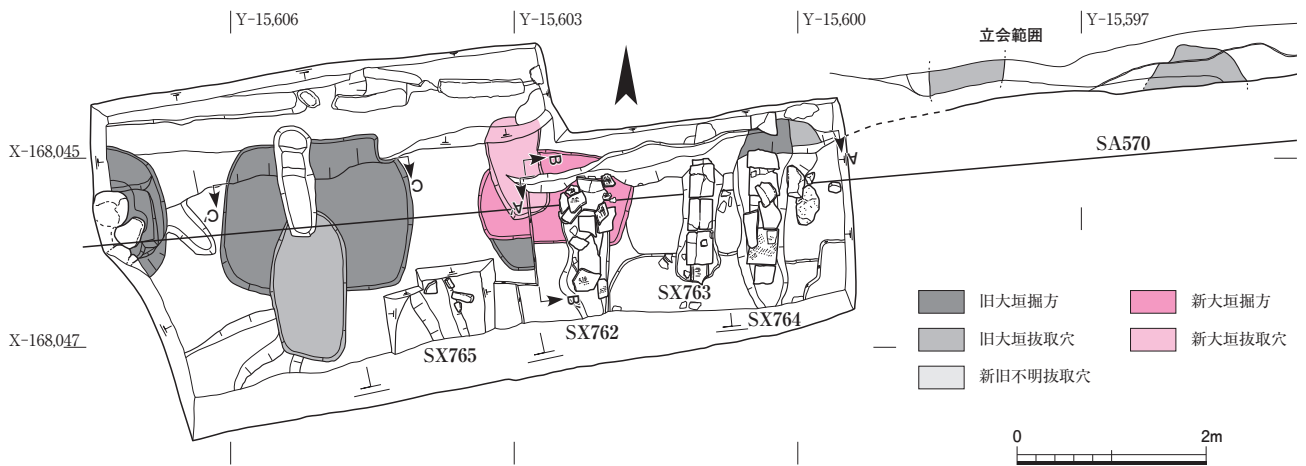


図130 第188-11次調査区遺構図 1 : 80

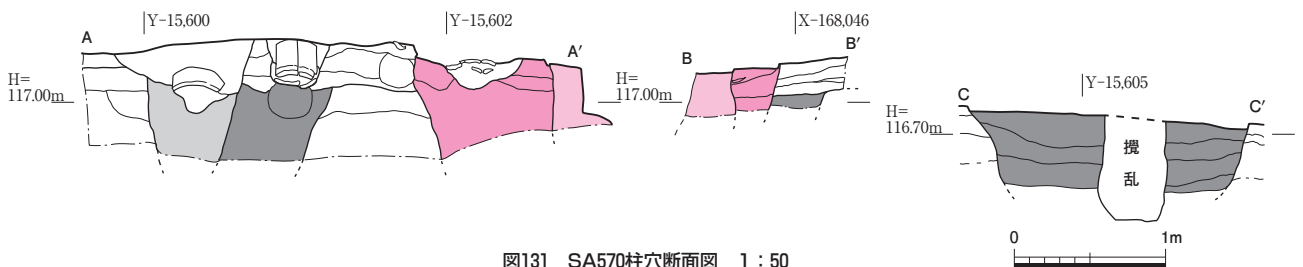


図131 SA570柱穴断面図 1 : 50

加えて、上部を新柱穴にともなう橙色整地土が覆う。そのため平面プランの検出はかならず、北側法面でその位置を確認するにとどまった。

**瓦組暗渠SX762** 調査区中央で検出した瓦組暗渠。第188-8次調査で南半分を検出し暗渠状遺構として報告したが(『紀要 2017』)、今回の調査で北側の遺存部分を全検出し、暗渠であることがあきらかとなった。第188-8次調査とあわせると検出総長は1.7mとなる。寺域内から北側への排水を意図したもので、北に向かって約3度で傾斜するが、北側は法面掘削時に削平されている。掘方は幅50cm、残存する深さは20cmほどで、その底に瓦を組み、土で埋めて暗渠とする。瓦は上部に平瓦を凸面を上向きにして伏せるが、下部の詳しい構造は不明である。おそらく平瓦を凸面を下に向けて敷いているものと推測される。第188-8次調査で確認した南端では、円形に収束する掘方の端に磚が立てかけられており、同部分が取水部であるとみられる。

**瓦組暗渠SX763** SX762の東側で検出した瓦組暗渠。検出長は1.3mで、北に向かって約11度で傾斜する。掘方は幅40cm、残存する深さ30cmで、掘方の底に丸瓦を凸面を下向きにして並べ、その上部に同じく丸瓦を凸面



図132 SA570柱穴検出状況(北から)

を上向きにして被せる。北側はSX762同様、法面掘削時に削平されている。南側も掘方および瓦がとぎれるため、一定の削平を受けている可能性もあるが、後述するSX764の状況からすると現状の南端付近に取水部が設けられていた可能性が高い。

**瓦組暗渠SX764** SX763の東側で検出した瓦組暗渠。検出長は1.6mで、北に向かって約9度で傾斜する。掘方は幅60cm、残存する深さ90cmで、SX763同様、上部に平瓦を凸面を上向きにして伏せる。南側は上部から削平



図133 瓦組暗渠SX762~764検出状況(北から)

を受けており、瓦は失われていたが、掘方が円形に収束する兆しがみられ、瓦組の南端も平瓦が向きを変え横位に置かれていたことから、同部分が取水部である蓋然性が高い。一方、北側は法面の崩落により失われていたが、崩落土内に瓦組の続きの一部が認められた。

**瓦組暗渠SX765** 調査区の中央南寄り、SX762の西側で検出した瓦組暗渠。検出長0.6mで北に向かって約3度で傾斜するが、北端は開削により遺存しない。掘方は幅40cm、深さは5~15cmと浅く、皿状の横断面を呈する。瓦の大部分が失われているが、検出時に北端の開削部で平瓦が凹面を上に向けてずり落ちている状況を確認しており、瓦組暗渠であったことは疑いない。(廣瀬 覚)

### 3 出土遺物

**瓦磚類** 本調査区から出土した瓦磚類の種類や点数は表20のとおりである。すべて古代のものであり、製作技法や胎土等の特徴からも山田寺所用と考えられる。特に瓦組暗渠SX762周辺、および②層から多く出土した。なお、瓦組暗渠SX762~764に用いられた丸・平瓦については、取り上げはせず、現地で保存している。

ここでは、比較的残りの良い軒瓦と垂木先瓦を図135に示す。1は山田寺所用軒丸瓦A種。SX762掘方から出土した。2は山田寺所用のなかでも、やや小型のD種である。②層より出土した。3は、第1・2弧線のみが残る小片だが、山田寺所用軒平瓦であり、そのなかでも第2弧線が太く、凹線が細いAⅡ種とみられる。①層より出土した。4・5は山田寺所用の垂木先瓦でもっとも小型のD種である。4は、中房中心の釘穴まで残存するが、



図134 SA570における柱穴の新旧(西から)

5は蓮弁のみである。4は②層、5は①層より出土した。

今回出土した軒瓦の各種は、軒丸瓦A種・軒平瓦AⅡ種が金堂所用、軒丸瓦D種・垂木先瓦D種が回廊・中門所用とされている(『山田寺報告』2002)。ただし、いずれも大垣が廃絶した後に廃棄され、二次的に堆積したり、転用されたりしたものであり、これらが本調査区で出土したのか、それとも他所から流入したのかは、本調査区での出土状況からは不明である。(石田由紀子)

**土器** 土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦器などが、整理用木箱に1箱分出土した(図136)。

1・2は、旧大垣の柱穴を覆って新大垣設置前に敷設された整地土(③層・橙色土)から出土した須恵器杯蓋で、かえりがあるものとないものが共存する飛鳥Ⅳの様相を示す。3は、②層から出土した土師器皿。康平3年(1060)もしくは嘉保3年(1096)の火災後の再建に関わる興福寺地鎮遺構SX7428出土品に類似する(奈文研『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概要Ⅰ』興福寺、1999)。小片ではあるが、黒色土器B類から転換して間もない時期の瓦器椀が伴出した。

遺構からの出土品には細片が多いが、瓦組暗渠SX765からは土師器皿(4~6)・罽釜(8)、黒色土器A類椀(7)、緑釉陶器などが出土した。天禄4年(973)に焼失した薬師寺西僧房の床面出土品(『薬師寺報告』1987)に近似するが、土師器皿に外反する口縁形態のものを含んでいる点が後出的で、10世紀末前後に位置づけうる。

(尾野善裕)

**鉄製品** 鉄釘とみられる小片が黒褐色土中および立会調査時の掘削土内から出土した。

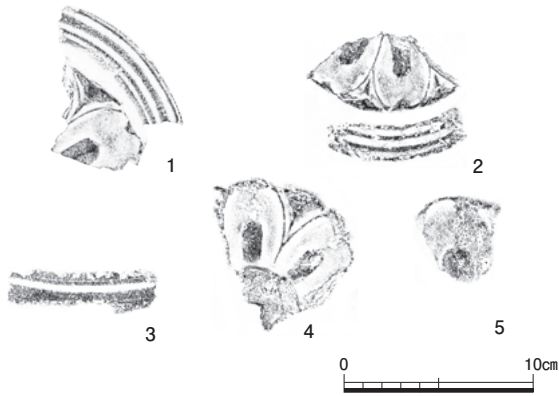


図135 第188-11次調査出土軒瓦・垂木先瓦 1 : 4

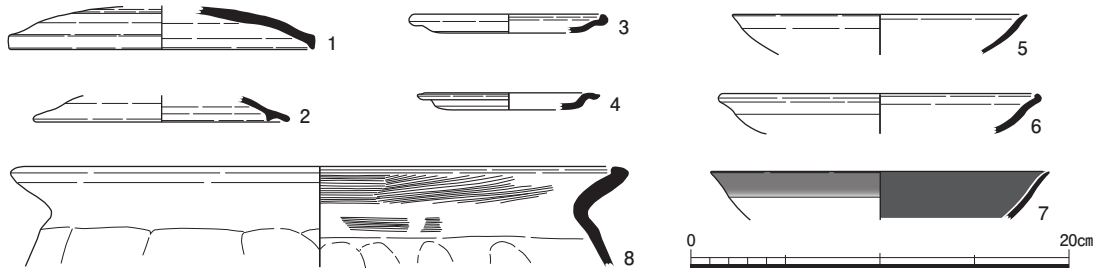


図136 第188-11次調査出土土器 1 : 4

#### 4 まとめ

以上のように本調査は、わずか21㎡の小規模な発掘調査ではあったが、北面大垣の柱穴列の位置を確認し、当初の目的を達成することができた。加えて、大垣廃絶後の瓦組暗渠を検出し、山田寺の造営と変遷の理解について、重要な所見を加えることができた。

北面大垣SA570の柱穴1基で確認した柱の立て替えの時期については、新柱穴設置にともなう整地中から出土した土器が飛鳥Ⅳの様相を示すことから、天武朝以降と考えられる。従前の山田寺の調査では、東西南北の各面で新旧の大垣が確認されており、旧大垣が創建期、新大垣は天武朝以降に比定されている。また、新大垣は旧大垣と同じ場所で柱を立て替え、さらに東面・西面大垣では旧大垣の柱を一部そのまま使用する状況もあきらかにされている（『山田寺報告』）。

今回の調査成果は、こうした大垣に関する既往の所見を概ね追認するものであり、北面大垣に関しても他の面と同様の経過をたどった状況を明確にすることができたといえる。以上の所見をふまえて、改めて第188-8次調査の成果をふりかえると、中区で検出した大垣の柱穴2

表20 第188-11次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦			その他			
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
山田寺	A	1	山田寺	A II	1	垂木先瓦 D	2	
	D	1		不明	1	へら描き丸瓦	1	
	不明	2				鬘斗瓦	2	
計		4	計		2	計		5
		丸瓦		平瓦		椽原石		
重量		15.8kg		81.2kg		0.2kg		
点数		151		541		1		

基は、重複関係をもたないことや検出面の標高からみて新大垣のものである公算が高い。

一方、北面大垣に重複して検出した瓦組暗渠については、暗渠掘方から10世紀末から11世紀初頭に比定できる土器が出土し、また暗渠を覆う包含層には11世紀後半の土器が含まれていたことから、大垣は遅くとも10世紀末から11世紀初頭には廃絶したことがあきらかである。やはり従前の調査では、東面大垣が10世紀前半に倒壊したのち、築地塀に改作されたことがあきらかにされている。南面でも築地のものとみられる版築が確認され、北面では東端において流水部に丸瓦を組み、自然石で蓋と壁を築いた暗渠が大垣と重複する位置で検出されたことから、各面で大垣から築地塀への改作がなされたものと理解されている（『山田寺報告』）。

今回検出の瓦組暗渠も一連の築地塀への改作にともなうものである可能性があり、暗渠掘方および包含層出土の土器の年代もそうした理解と大きくは矛盾しない。ただし、築地の版築土自体は未検出であり、また同じ場所で執拗に暗渠の構築を繰り返す点はやや不可解といえる。北面の築地塀への改作の可能性に関しては、周辺の調査の進展を待って結論を下すことにしたい。（廣瀬）